

柳内たくみ 著

Yanai Takumi



ゲート

GATE

SEASON 2

自衛隊 彼の海にて、斯く戦えり

3. 熱走編

GATE SEASON2 3: MAKE SEAWAY HEATEDLY

その他の登場人物

シャムロック・ハ・エリクシール ティナエ「十人委員会」の一人。
 ドラケド・モヒート アヴィオン海海賊七頭目の一人。
 オディール・ゼ・ネヴュラ ドラケ海賊団オディール号船守り。
 ダーレル・ゴ・トーハン アヴィオン海海賊七頭目の一人。
 濱湊伸朗 海上自衛隊ミサイル艦隊司令。
 黒須智幸 海上自衛隊ミサイル艦「うみたか」艦長。
 高橋健二 海上保安庁一等海上保安正。
 レディ・フレ・バグ 海に浮かぶ国アトランティアの女王。

主な登場人物

徳島 甫

海上自衛隊二等海曹。
 江田島統括官付きとして
 特地の調査任務にあたる。

オデット・ゼ・ネヴュラ

アヴィ
 翼皇種の少女。
 オデットII号の船守り。
 鯨鯨の襲撃に遭い
 両下腿を失う。

シュラ・ノ・アーチ

ティナエ海軍オデットII号艦長。
 正義の海賊アーチャー族の血を引く。

メイベル・フォーン

ロクソリマーキエリー
 「黒い奴」との戦いに敗れ、
 神に見捨てられた巫神。
 徳島、江田島とともに行動する。

プリメーラ・ルナ・アヴィオン

「碧海の美しき宝珠ティナエ」
 統領の娘。『酔姫』の異名を
 持つ。亡国アヴィオン王家の
 血を引く。

江田島 五郎

海上自衛隊一等海佐。
 情報業務群・特地担当統括官
 として調査任務にあたる。

特地アルヌス周辺

●ロンドン

帝都●

●イタリカ

○アルヌス

碧海

グラス半島

エルベ藩王国

クンドラン海

トュマレン

●メギド

アヴィオン海

碧海



アヴィオン海周辺



序

特別地域／アヴィオン海とクンドラン海のほぼ境あたり／北緯二八度二四分・東経一二度五三分
 ロンデル標準時間〇五三五時――

蒼穹に浮かぶ白い機体。

雲の隙間から姿を現しては隠れ、また現すを繰り返すそれは、P3C哨戒機。海上自衛隊・特地派遣海賊対処行動航空隊所属の隊員達が乗り込む機体であった。

彼らは眼下の蒼海で起きている出来事を監視していた。

「TACCO（戦術航空士）！ 民間商船二五隻と、海賊の帆船が、ひいふう……一二、いや三……合わせて一三隻見えた！」

双眼鏡片手に、小さな窓に張り付くように海上を監視する隊員達が目にしたのは、逃げる商帆船

団と、それを追う海賊帆船の群れという光景である。

追う側が海賊だと分かったのは、揃って黒い帆を掲げているからだ。

存在そのものが人倫や法律に反する海賊達だが、彼らも仕事の際には自分達が何者であるかを示すというルールだけは健気に守っていた。

T A C C O は状況を把握すると、航法兼通信を担当する N A V / C O M M に対し、ティナエ共和国の首都ナスタに置かれた海賊対処行動航空隊司令部に速やかに報告するよう命じた。

『司令部、ユラヒメ〇二。哨戒エリア〇四六六にて海賊に襲われている商船団を発見した……』

そうして改めて窓から海面を見下ろす。

海賊の帆船が、激しい砲撃の噴煙を上げていた。

発射されているのは、炸裂しない純然たる金属の塊だ。しかしその威力は想像以上に凄まじく、商船に直撃すると船体を構成していた木材が破片となって辺りにまき散らされた。

周囲の碧い海面には、倒れ落ちたマストや白い帆、こんがらかった索具といったものがゴミのごとく浮いている。そしてその隙間には、動かなくなった人型の何かが無数に浮かんでいるのも認められた。

「これは酷いな」

「くそ……」

商船の甲板^{デッキ}上（日本では、シビリアン籍の船の甲板を『こうはん』と読む習慣がある。由来は不

明）では、乗組員が剣を振るい必死になって海賊と戦っている。

だが多勢に無勢、戦いは海賊の側が優勢だ。既に抵抗力を失い拿捕^{逮捕}された船では、海賊達が勝利の雄叫びを上げ略奪を始めていた。

「おい、あれを見ろ」

略奪の対象は荷物だけではない。

乗客として乗り合わせていたと思われる男女、子供達が海賊によって力づくで船倉^{せんそう}から引きずり出されている。みんな懸命に抵抗しているが、ならず者にはとても敵わない。

このような粗暴な海賊行為は、銀座側の世界では過去のもとして映画のワンシーンに登場するだけだ。それだけに隊員達には、この光景が今ひとつ非現実的なものに思われたのである。

「くそつ、この世界の海軍は何をしているんだ？ 船団に護衛船も付けないのか!？」

「いや多分、あれが地元海軍の艦艇^{かんてい}です」

P 3 C は周囲を旋回し、監視を続けた。

この世界の海では一般商船と戦闘艦を見た目で区別するのは難しい。帆船といってもマストの数や帆の形状、枚数など様々な種類があるし、どの船も自衛を目的とした武装を施している。

しかしそれでも明らかに、自衛の範囲を超える武器を積んだ船が商船団の中に混ざっていた。それが、群れを成して押し寄せる黒帆の海賊船と果敢に戦っているのだ。

「あれがティナエの海軍なのか？」

目を凝らしてみると、海賊と戦っているティナエ海軍艦のマストに海軍旗がはためいていた。

よくよく見れば船首楼甲板には、大型の弩のような武器も装備されている。

彼らは迫ってくる海賊船を追いついて散らそうと、電信柱のような太くて長い弩檣を投射し、無数の弓箭を放って必死に奮戦していた。

しかしその必死さのほとんどは報われていない。海軍の艦艇は、海賊一三隻に対してわずか四隻しかないのだ。あるいはこの戦いの中で、強力な海賊船団に一隻また一隻と沈められてしまったのかもしれない。

ここまで一方的な戦いになってしまっているのは、海賊がこの世界に存在しなかったはずの新兵器——大砲を装備しているからだ。

海軍の艦隊は、得意とする移乗戦闘を始める前に、大砲でマストを折られ、舵板を割られ身動きを取れなくされてしまう。

そうなると武器を手甲板に集まった水兵達は手も足も出ない。射撃練習の標的のように一方的に狙い撃たれていくだけだ。

これでは海賊に対抗することなどとても出来ない。出来るはずがないのだ。

「くそっ……なんて酷いことを」

大砲の砲弾を四方八方から撃ち込まれた海軍の艦艇は、とても正視できない惨状を呈していた。

露天甲板には、動かなくなった屍が鮮血にまみれて累々と横たわっている。そしてそのまま、船

は海に沈んでいこうとしていた。

「おい、あの娘まだ生きてるぞ！」

船には、アヴィオン海の風習で船守りという巫女が乗り込んでいる。

その有翼種の女性が屍の間に座り込んだまま、虚ろな表情で空を見上げていた。おそらくあの艦の乗組員達は、彼女を庇って倒れていったのだ。

双眼鏡で様子を見つめていた海自の隊員達は、その娘と目が合ったような気がした。

「くそっ、どうしてこの機には、爆弾の一個も、魚雷の一本も搭載してないんだ！ もしあれば掩护できるつてのによ！」

だが、彼らに与えられた任務は『監視』である。

手を出してはならない。

任務に忠実であらねばならない責務と、目の前で起きている惨劇に対する義憤とで板挟みとなつた彼らは、砕けてしまいそうなほど力を込めて奥歯を噛みしめたのである。

*

*

黒翼の少女オデール・ゼ・ネヴュラは、うなじあたりに刺すような気配を感じて背後の空を見上げた。

「ん？」

だが漆黒一色の翼を広げて身を振り、強い陽射しに腹部を曝す背面飛行に移った彼女に見えたのは、水平線から顔を覗かせたばかりの太陽と、空と、雲だけである。

「ちっ、気のせいだよ」

すぐに半横転し、意識を眼下の海へと戻そうとする。

「いや、違うな……」

しかしどうしても疑念を拭いきれず、自分の翼から黒羽を一枚引き抜くと、それに透き通すようにして東の空を覗く。すると、太陽の強い輝きに隠されていた何かの正体が見えてきた。

「あれは……ヒコウキ？」

大空とはこれまで、有翼種の縄張りであった。

だが最近はその常識が崩れつつある。ニホン人と呼ばれる連中が持ち込んだヒコウキという魔法装置が、このアヴィオン海の空を飛ぶようになってきたのだ。

もちろんそれらが一機、二機飛んだところで、有翼種が飛べなくなるほど空は狭くはない。しかしその強烈な存在感はどこか古代龍にも似ていて、そんなものがあると思うだけで息を潜めたくなってしまうのだ。

「ドラケ！」

すぐに報せようと、振り返って海上に目をやる。

するとオデイルの名を冠した黒帆の海賊船は大砲をぶっ放していた。

「撃てえ！」

船長ドラケ・ド・モヒートの号令が轟くと、海賊船オデイル号は第二甲板（一番上の甲板を第一として、その下にある甲板）の右舷側に並んだ大砲十門を一斉に撃ち放った。

大量の噴煙が、すれ違う形で行き合った海軍の艦との間に立ちこめる。一瞬にして視界が塞がれお互いの姿は見えなくなった。

その一斉射撃は、パンタグリユエル商船団を護衛するティナエ海軍の軍艦からマストを奪った。巨大な帆柱の根本が打ち砕かれ、音を立てて倒れていく。

甲板に大きなラティーン型セイルとそれに繋がった大小の索具が覆い被さる。移乗戦闘に備えて集まっていた水兵達は大騒ぎしながら右往左往し、大混乱に陥った。

「よし、今だ！ 風下に舵を切れ！」

その隙を見逃すドラケではない。船尾楼甲板の右舷に走り寄って敵を睨み付けつつ命令を続けざまに発した。

「ラーラホー船長！」

直後、オデイル号は素早い挙動で針路を右に変更。

折れたマストを海中に引きずり行足が止まった海軍の艦は、それに付いていけず無防備な艦をオ

デイル号に曝すことになった。

「撃て！」

再度行われる、舷側に並んだ大砲十門の一斉射。

すると発射された鉄の球塊が敵艦の艦板を破った。

艦尾を形作る船材が木っ端微塵になり、辺りに横殴りの吹雪のごとくまき散らされる。

しかし砲撃はそれで終わりではない。砲手達が大砲に群がって爆轟魔法の充填、弾込め、そして着火……間断なくこの三工程を二回繰り返した。

「撃て！」

「撃て！」

この三連撃で、海軍艦の中は滅茶苦茶になっているはずだ。何しろ一抱えもあるような大きな鉄塊が都合三十発、爆轟魔法の力で打ちこまれたのだから。

こんなものが艦の弱点である艦から飛び込んで艦内で跳ね回ったらどうなるか。

身体を掠めただけで、タフネスを気取った屈強な戦士もたちまち血袋肉塊と化してしまう。

そして鎖に繋がれた漕役奴隷達も、それぞれの座席に繋がれたまま逃げることも出来ずに絶命していった。

「よしや、とどめだ。とどめを刺せっ！」

「そうだそうだ、海の藻屑にしてやれ！」

戦いの熱狂に興奮した海賊達が、更なる砲撃をとドラケに求めた。彼らは憎い海軍の艦を徹底的に破壊し尽くし、海に沈めることを求めている。

しかしドラケはこの艦との戦闘はここで終了だと宣言する。

「なんで!?!」「どうして!?!」

「馬鹿野郎！ 海軍なんか相手にしたって何にも得られるものはねえぞ。狙うならお宝だろう!? お宝をたんまり積んだ商船を狙うんだ！ それとも、お前達の腹はもう一杯か？ これ以上は食い切れないってか？」

ドラケはそう言って、獲物となるパンタグリユエル商船団の方角に船を向けるよう命じたのである。

「そ、そうだった!!」

戦いの興奮で我を忘れていた海賊達も、自分達の狙いが何であるかを思い出した。そして航海士の指示に従って甲板を走り、帆の向きを変える索具を引っ張って、金銀財宝をたつぷりと積み込んでいるはずの商船群へと舳先を向けたのである。

「ドラケ！ ドラケったら、ドラケ！ 返事しろよ！」

高度を下げたオデイルの声が、マストトップで見張りをする乗組員の耳に入ったのは、そうした作業の喧噪が一段落ついた後だった。

海上の戦いは、芝居や御伽草子のようにテンポよくは進まない。

戦っている最中はもう「頭や身体が一つじゃ足りん！」と叫びたくなるほど忙しくなるのに、それが終わって次の獲物に追いつこうとすると、途端に暇になる。

特に帆船同士の戦いは同じ風を受け、どちらが速く進めるかを競う、船の性能比べ、乗組員の技量比べでもある。手巾でも洗濯物でもとにかく風を受けられるものを帆柱にぶら下げ、相手に追いつこうとするのだ。

相手だって命が懸かっているから必死だ。なんとか引き離そうと工夫する。

船の性能、乗組員の技量と根性——この差が明確ならばあつという間に追いつき、あるいは突き放されるが、拮抗していると、何日も、下手をすると何十日も、どちらかが諦めるまで延々と追いかけてこをしようといったことが起こるのだ。

そうなると、目と鼻の先に敵がいるというのに、次の戦いまで間が空いてしまう。

敵愾心を燃やして戦いに挑まんとしても、ちつとも始まらないため乗組員達は大いに氣勢を削がれることになるのだ。

そんな時にどうするかを考えるのも船長の資質と言えた。

ドラケは甲板に無造作に積み上げてあつた略奪品の箱や樽を、それぞれ船倉へ移すよう配下に命じた。それらは襲撃初期に拿捕した船の略奪品である。船倉にしっかりと収めておかなければ、次の戦いで傷物になったり邪魔になったりする可能性があつた。

「へーい」

すると海賊達も、疲れているのにもかかわらず、不平を漏らさず荷物を抱えて梯子段の上り下りを始めた。彼らも海賊歴が長いから、いくらイキついても疲れるだけだということを知っているのだ。やれることをやる時にやる。そういう切り替えの速さが、海賊に求められる資質なのかもしれない。

「あと、子供達を休ませろ！ いいな！」

「ラーラホー、船長！」

「お前達も、はしゃいでないで眠れる時に眠っておけ！」

大砲の傍らにいた子供達が「はーい」と声を揃え、疲れを癒やすべく船室に下りていった。すると入れ替わりに掃除の担当者が上がってきて、血で汚れた甲板の掃除を始める。

海賊と言いながらも、オデイル号の規律はこのように存外よく守られていた。それも全てはドラケの薫陶が隅々にまで行き届いているからなのだ。

「お頭！ オデイルの奴が叫んでますぜ！」

見張り員のガルツからの報告がドラケの耳に入ったのは、そんな時だった。

ドラケは、振り返りざまに見張り員ガルツの頭を拳でぶん殴る。

「痛っ、何すんすかっ!? いきなりっ！」

「船長と呼べと言ったろっ！」

「す、すみません」

「それと、オデイルがあれだけ騒いでるってことは、お前、見張りを怠^{おした}っていただろう!」
上空で何やら忙^{まじ}しく舞うオデイルを見上げたドラケは、ガルツにそう指摘する。

「す、すみません。つい戦いに目が行っちゃまって。あの凹凸^{おうちう}の少ない細^こい身体じゃ、眺めていても飽きますし、俺としちゃあもつと豊満なほうが……」

「馬鹿野郎。そんなこと本人の前で決して口にするなよ! あいつ案外気にしてるんだ!」

「分かつてますって! おいらだってそんなに命知らずじゃねえ!」

「とにかくこれに懲^こりて、二度とオデイルから目を離すな。いいな!」

「ら、ラーラホー船長!」

それだけ言い終えると、ドラケは単眼鏡を取り出し上空のオデイルへ向けた。すると漆黒の翼を広げたオデイルが再び踊るように舞った。

そのバレエにも似た空中舞踊は実はそのまま信号となっている。戦場ではあちこちで大砲が発射され、海賊の雄叫^{おほ}びや乗客の悲鳴が上がる。そんな環境ではとても声だけでの意思疎通は不可能だ。そのために編み出されたのが彼女達の信号舞^{しんごうぶ}だった。

もちろん誰も見てなければ意味はないのだが……

「ガルツ! オデイルの信号舞を読み上げる!」

「は、はい。花、黒、青、黄色、……意味は……えつと……警戒、敵、近付く……以上です!」

ガルツは手元の信号表と照らし合わせながら言った。

「『敵、近付く』だど!」

ドラケはオデイルの指差す方向に単眼鏡を向けた。すると確かに見慣れない何かが飛んでいる様子が見えたのである。

翼や胴に赤い丸のマークが入っている。噂に聞くニホンのヒコウキだ。

しかしその動きは、オデイルが言うような警戒が必要なものとは思えない。ヒコウキは狩り場となった海域の外縁を、ゆっくりと周回しているだけだからだ。

「ちつ、くそつ。そういうことか!」

しかし、一見無害に見えるその行動が何を意味するかに気付いたドラケは舌打ちした。

「ガルツ、信号旗を掲げる。撤退だ! ずらかるぞ! 取り舵!!」

甲板で作業をしていた海賊達は、信じられないものでも見るかのような顔をして、働かせていた手や足を止めたのだった。

船長は、船の上では絶対的存在だ。

乗組員はたとえ納得できなくとも、船長の命令に従わなくてはならない。

「と、取り舵いっぱい!」

操舵室にいる操舵長は、首を傾げながらも舵柄^{だへい}を引き、甲板員達も何が起きているのかと疑問に思いつつ、言われるまま帆の向きを変えていく。

オデイル号は獲物を追うコースからこうして離れていった。

「船長!? 一体何をやってるんです!?」

するとクォーターマスターのパンペロが血相を変えてドラケの元にやってきた。

クォーターマスターとは、海軍や民間商船にはない海賊独特の役職だ。

船の上では船長に権力の全てが集中している。しかしそれでは乗組員達が一方的に酷使されるだけで終わってしまう。そしてそのままにしておく、反感を溜めた乗組員が反乱を起こして船長を追放するという結末に向かうことになる。

そういった事態を防ぐために作られた役職がクォーターマスターであった。

乗組員達の代表として選出されたクォーターマスターは、船長の権力濫用を監視し、海賊活動で得た戦利品の公平な分配を担当する。言わば、企業における組合代表のような立場だ。

そんなクォーターマスターが、ドラケの判断に異議を唱えるのも至極当然であった。

これまでオデイル号が海軍の軍船を片付けることに専念してきたのは、パンタグリユエル商船団の財貨を奪い取って我が物とするためだ。ここに至るまでの苦勞、血と汗の代価は、これから回収するのである。それを途中で止めてしまったら全てが台無しだ。

「んなことは俺だって分かってるさ、パンペロ。でも仕方ないだろう?」

「船長、一体何故なんですか?」

「あれだ、全てはあいつのせいだ……」

ドラケは、嫌そうな顔をしながら空に浮かぶP3Cを指差したのである。

オデイル号のマストに、するすると信号旗が上がる。

黄色、緑、白、青……色とりどり、様々な模様の旗が並ぶそれは、ドラケから全海賊船に向けて退却を指示するものであった。

すると三隻の船が、『了解』を意味する旗を揚げ、オデイル号の後ろを追従するべく針路を変える。だが、他の海賊船は彼の指示に従う素振りを見せなかった。

「ちっ、くそっ! どうして奴らは俺に従わない!」

パンタグリユエル商船団のような大きな獲物を襲う際、海賊は他の頭目に声をかけて複数の船団を集めて仕事をする。そうしないと護衛に付く海軍の艦と渡り合えないからだ。それゆえ今回はドラケが率いる四隻の他、ダーレル海賊船団から五隻、ブラド海賊船団から二隻、そして単船海賊が二隻参加していた。

もちろん指揮系統がバラバラでは数の力を活かせないから、最初に獲物を見つけた海賊船団の頭目——今回の場合はドラケだった——が襲撃を仕切るのがしきたりだ。だが、そのドラケの退却指示にもかかわらず、ドラケの船団以外は従わなかったのである。

「みんな獲物に夢中でこっちを見てないんじゃないすか!」

きつと戦いとお宝と女に夢中なのだと信号手のガルツは言った。

そんなのはお前だけだ、とはドラケも言えなかった。

見張りがよそ見をするなど海軍や民間商船なら厳罰ものの行為だが、ならず者ばかりが乗り込む海賊船では、そもそもそうした厳正な規律を求めること自体に無理がある。退却の指示に素直に従うドラケの海賊団員のほうがむしろ珍しいのだ。ガルツもオデールの信号舞を見逃したが、それも随分マシなほうだった。

「くそっ、なんてこった!？」

ドラケは頭を抱えた。

「どうしますか船長？」

「仕方ない。航海士！ 船をモナム号に寄せる！」

ドラケの命令は、航海士によって具体的な指示に翻訳されて甲板員に伝えられていく。

操舵室で操舵長が舵柄を引き、掌帆長の指示で帆の向きが変えられ、またしても船は針路を変えた。

「船長、一体何しようってんです？」

クォーターマスターのパンペロが問いかけてくる。

「ダーレルの野郎が信号を見てないってんなら、直接言ってやらなきゃならんぞ！ お前達、俺が戻るまで待つてろよ」

「まさか、モナム号に乗り込むんですかい？ 他所の船に勝手に乗り込むなんてことしたら、ダー

レルのお頭にぶっ殺されちまいやすぜ！」

「馬鹿言うな、いくら奴でもいきなりそんなことはしねえよ」

自分のことは船長と呼ばなければ怒るくせに、他の海賊団の頭目ならば気にしないドラケは自信ありげに言った。

「しないよな？」

いや、彼自身もそれほど自信はなかったらしい。しかし同意を求められてもパンペロには答えようもなかった。

ドラケの目指すモナム号は、ダーレル・ゴ・トーハンが船長をしている船だ。

ドワーフ種のダーレルはもともと船大工だった。

気性が荒く度胸もあり、しかし悪知恵も回ったため、何かと海賊に頼られることも多かった。そのため船匠長として船に乗り込むようになり、いつしか船長になった。そして今では大小十数隻の船を従える海賊集団の頭目として、アヴィオン海賊七頭目の一角と目されるまでに成り上がったのである。

ダーレルは今回の襲撃でもその悪知恵を遺憾なく発揮していた。

海軍のような手間がかかりながらも利益の少ない相手はドラケに押しつけ、自分達は商船団から零れるように逃げていく小型の商船をもっぱら襲っていた。

それは積み荷満載の大型船の優先権をドラケに奪われた腹いせと、出遅れた分を質よりも量で取り戻そうと思つてのことでもある。

今もまた、商船団から離れて逃れようとする小型商船の後方から追い縋り、左舷側に回つてその行足を止めるべく大砲を放とうとしていた。

オデイル号は、そんなモナム号の左側へと接近した。しかし戦闘機動中の帆船に舷を寄せるのは簡単なことではなく達人的な操船技術が必要となる。

ドラケが振り返つて航海士のスプーニに問いかけた。

「もうちよつとモナム号に寄せられないか？」

「無理だつて船長！ これ以上寄せたら衝突しちゃう！」

二隻の船は波と風に翻弄されながら進んでいる。

概ね真つ直ぐに進んでいるが、波立つ海は陸に例えるなら山と谷だ。駆け上る時は大きく傾き、下り斜面に差し掛かれれば滑つて波が作る谷間に落ちる。これを繰り返す訳だから、当然横揺れも大きくなるので、不用意に距離を詰めれば舷側同士が激突し、下手をすると船が損壊してしまうことも起こり得るのである。

「お前なら出来るはずだ、スプーニ！」

ドラケは無理を言いながら帆桁ほげたの端から甲板に降りてきている動索どうさくの一本に手をかける。そして船縁ふなべりに足をかけて二隻が最も近付くタイミングをじつと待った。その瞬間を見計らい、動索にぶら

下がつて振り子の要領で渡ろうというのだ。

しかしその時だった。

「きゃああっ！」

目前のモナム号の舷側に開いた窓から、突如として少女が海へと落ちていった。

「あっ、お、おいっ！」

落下する瞬間のジタバタとした振る舞いから察するに、自分の意思で飛び込んだのではなく、外的な力で放り捨てられたという感じてあった。

海に落ちた少女は一旦沈むが、すぐに水面上に顔を出す。そして波間で手足をばたつかせていた。おそらく泳げないのだろう。

「おい！」

オデイル号の見張りや乗組員達がモナム号の乗組員に伝えようと大声を上げる。しかし大砲の発射音、海賊達の歓声にかき消されてまったく届いていない。

「馬鹿野郎、何やってやがる！ 乗組員が落ちたんだぞ！」

そうしている間にも少女は波間に呑み込まれてしまった。

実は海を生活の場としている船乗りでも、泳げる人間は案外と少ない。昨日今日船に乗ったような子供なら尚更だった。

「くそっ」

ドラケは忌々し^{いまいま}そうに舌打ちする。そして思い切って海へと飛び込んだのである。

* * *

特地の海で用いられる船は、銀座側世界で言うところの『ガレアス型』が多い。

この型は帆と櫂^かという二つの推進機関を持っている。そのため波が比較的静かだが風向きの変わりやすいアヴィオン海での運航に適しているのだ。

しかし最近、海賊の間では少しばかり事情が変わってきていた。

大砲という新兵器が回るようになったからだ。

問題はこの大砲が鉄の塊だということ。非常に重いため露天甲板にずらっと並べると船の重心位置が高くなり、船が動揺してからの復元性が激しく低下する。簡単に言うと、船が操りにくくなってしまうのだ。

そうなる^{ふなめし}と船足が遅くなり、獲物の商船に追いつき難^{にく}くなる。海賊という本業に差し障りが生じるのだ。

そこで船大工でもあったダーレル船長は思い切って櫓漕室^{かいそう}と漕役奴隷を廃止した。

大砲によって衝角^{しょうかく}を用いた戦いの必要性が低下したこともある。無風時は乗組員達を露天甲板に並べて船を漕がせることにして、第二甲板の主を大砲にしたのだ。

これによって船の重心は低くなった。

そしてその結果は良好だった。

彼の工夫は、アヴィオン海諸国の海軍を相手にしても、ほとんど負けることがないという成果をもたらし、今では他の海賊達の多くがそれを真似て大砲を下部甲板へと並べるようになったのである。

海賊船モナム号の薄暗い第二甲板では、ずらりと並んだ右舷側の大砲の間で、海賊達が砂鼠^{すなねずみ}のごとく忙しなく働いていた。

「おら、次だ。早く次を撃て！」

船長のダーレル・ゴ・トーハンが、乗組員達を厳しい声で叱咤^{しっただ}する。

この男、ぬめつとした禿^{ひげ}げ頭と髭面、ドワーフ独特の酒樽のように腹の突き出た体躯という容姿である。

その見てくれとすぐに手が出る暴力的な性格もあって、配下の海賊達は彼のことを非常に恐れていた。そのため追い立てられるように働くのだ。

「ほら、急げ、急げ！ 遅れる奴は大砲の中にその頭をぶち込んでやるぞ！」

掌砲長の合図で、掃除係が大砲の砲口から長いブラシを差し込んで数回前後させる。

続いて火薬役のパウダーモンキー——この世界でパウビーノと呼ばれる少年少女達が、それぞ

れ担当する砲の尾栓に手を翳し、爆轟魔法を充填していった。

パウビーノとは、広い意味では魔導師だ。

しかしながらここにいる彼らは、実質は魔導師にはなれなかった者とも言えた。

様々な魔法を自在に操るような才能がなく、初歩的な魔法をどうにか使える程度でしかない。そのため師匠から魔導師の道は諦めなさいと見切られたのである。

彼らは自分にも魔導が使えると知った時、いずれは大賢者か、大魔導師か……それが無理でも、とにかく平凡とは違う生活が待っていると野心の炎を胸中に灯した。

自分はそのあたりの一般人とは違う。将来は安泰だ、という優越感に染まったのだ。なのに、お前にその能力はないと宣告されてしまった。そうした挫折体験は、幼き彼らの夢や希望、自尊心といったものを粉微塵に打ち砕いた。

そんな彼らにとある組織が近付いた。その者達は、中途半端な才能を抱えて腐ってしまった子供達を集めるところ囁いたのだ。

「お前達の力で、何もかもぶち壊してやればいい。そもそも世の中のほうが間違ってるんだからな。お前達の価値を認めない世の中や世界に何の意味がある？ お前は特別な存在だ。他人から尊敬され、敬われる資格がある。なのにどうしてお前達は報われない？ いい思いが出来ない？ それはどこかの狡い奴らがお前達のいるべき場所を、得るべき取り分を掠め取っているからだ。周りを見る！ 凡百の馬鹿者どもが、家畜のように扱われている。にもかかわらず、奴らはその狡い奴ら

崇めている。搾取されるだけの人生をよしとしてるんだ。だがお前達は違うだろ？ 自尊心ある者だ。お前達は世の仕組みに気が付いている。真に倒すべきものが見えている。だからその全てを、間違った全てをぶち壊せ！ 大砲と、お前達の力で思い知らせてやるんだ！ 犠牲？ 気に留めるな、小狡い奴らに従っているような奴らは向こう側、つまり敵だ！ これは全てをひっくり返すための戦い、戦争なんだ。戦争に犠牲は付き物だろう？」

彼らの言葉は鬱屈した少年や少女達の心を巧みに捉えた。

少年や少女達は行き場のなかった暗い情熱を特訓に注ぎ込み、己の役目を爆轟魔法に特化させたのである。

全ては自分達を認めなかった世の中を破壊するため。新兵器である大砲はまさにそれに相応しい武器だ。彼らは海賊とともに既存の価値観、制度、人間……あらゆる全てを圧倒し、打倒し、破壊し尽くすため、額に汗しつづ渾身の力を振り絞っていた。

少年が息せき切りながらも叫んだ。

「お、終わりました！」

「よっしゃ！」

すると待っていたかのように、海賊の一人が砲口から人の頭サイズの鉄の塊を押し入れた。

「撃ち方よーい！」

装填が済むと、全員で砲架を押し、砲口を砲門——舷側に開いた小窓——から押し出す。

「用意よしっ！」

既にモナム号の右舷側には、敵商船が横腹を曝している。それに向けて掌砲長が狙いを定めた。

「撃てー！」

ダーレルの合図で、尾栓^{びせん}の火口に火縄が押しつけられる。

大音声とともに大砲が一斉に火を放った。

発射の勢いを受け止めた砲身が、砲架とともに船内で後退し、もうもうと大量の噴煙が辺りを満たした。

本来、爆轟魔法では噴煙は生じないものだ。しかし焼素^{しょうそ}と燃素^{ねんそ}の混合割合が適正でないこのような噴煙や煤^{すす}が生じる。完璧な割合を短時間で構成できるのは、真に実力のある魔導師くらいなのだ。

しかしそんなことは些末なこと。要は砲弾を撃ち出せばよいのだから。

砲弾は真っ直ぐ飛翔し、商船の舷側に直撃。飛び散った木片が、周囲にいた乗組員に横殴りの吹雪のごとく降り注いだ。

「命中！」

「やったぞ！」

商船の乗組員達が次々と斃^{たお}れていくのが砲門から覗けた。

敵を倒した。自分の力が敵の船を打ちのめした。

破壊衝動が達成された爽快感に、パウビーノは酔った。

自分の力がこれだけのことを成したのだという威力に酔いしれた。

そして、他の海賊達と一緒にになって歓声を上げたのである。

「お頭、火矢が飛んできましたぜ！」

商船の側も一方的に殴られてばかりではない。

反撃のために豪雨のごとく放たれた火矢が、モナム号の右舷に次々と突き立つ。甲板にも突き刺さる。帆にまで突き刺さって、火をあちこちに燃え移らせていった。

だが海賊達は、そんなものには痛痒^{つよう}を感じなかった。燃え移った炎がそれ以上広がらないように、手慣れた様子で水をかけ、砂をかけて回る。

「次だ。次の用意だ！」

消火作業が滞りなく進んでいることを確認したダーレル船長は、砲手達を急き立てるように次弾の装填作業を命じた。

砲の掃除が終わると、パウビーノは呼吸を整える間もなく次の魔法のために全身の魔力をかき集める。そして尾栓に手を翳し、薬室内に爆轟魔法を構成していった。

「よし、次いいか？」

「あうっ……」

だがその時、一人の少女が崩れるように膝をついた。

少女の全身から滴る汗が、甲板に水溜まりを作っている。少女はそのまま水溜まりの中に倒れ伏してしまった。

大量の発汗、呼吸困難、全身の痙攣——それらはいずれも魔力を消耗し過ぎた時に起こる症状だ。「何してやがる！ 誰が寝っ転がっていいって言った!？」

掌砲長が怒鳴った。

少女は爪先で小突かれると、立ち上がろうと力を入れる。だが、疲れ果てているせい、小さなその身体すら起こすことが出来なかった。

「も、もう無理……です。少し休ませてください」

すると後ろで見ていたダーレルが手を伸ばし、少女の髪を鷲掴みにして持ち上げた。

「はあ、ふざけたこと言ってるんじゃないやねえ！ 無理ってのはな、嘘吐きの言葉なんだよ！ その言葉を理由に途中で止めちゃうから物事ってえのは無理になる！ たとえ出来なくても続けろ、続けていけば、いずれ無理じゃなくなるんだ！」

「そ、そんな……理不尽な……」

「だいたいこれしか能がないお前が今頑張らなくていつ頑張るってんだ？ 弱音吐いている暇があったら、気合い入れやがれ！」

「ダ、ダメです。無……理です！」

「まだ無理って言うか？ 本当に無理か？」

「は、は……い」

「なら、役立たずのお前は不要だ！」

ダーレルは興味を失ったかのような表情を浮かべ、少女の身体を持ち上げると海に投げ捨てた。「な……」

少女は我が身に起きたことを理解できないまま、左舷側に開いた砲門から外へと投げ出される。

「ひ、酷……い」

それを見ていた他の海賊、そしてパウビーノ達は驚きと恐怖で息を呑む。

ダーレルはそんな少年の一人に右手を伸ばして捕まえると命じた。

「これからはこっちの砲もお前が担当だ、いいな!？」

「え、ええっ!？」

これまで担当していた砲の面倒すら大変だというのに、今からそれが倍になる。その絶望感に声を上げた。

しかしダーレルは皆を振り返って告げた。

「お前達も、よく聞け！ この船には役立たずを乗せてる余裕はねえ！ 海に放り出されたくなければ死ぬ気でやるんだ。いいな！」

パウビーノ達は絶望感に天を仰ぎたくなった。

話が違う。自分達パウビーノは大砲操作になくてはならない存在として、もっと敬われるはずだったのだ。

しかし逆らえば海に放り出される実例を目の当たりにしたばかりである。

皆がダーレル船長の視野に自分の姿が入りませんようにという思いで、自らの命を削るような爆轟魔法に神経を集中させたのである。

モナム号の第二甲板に、オディール号船長のドラケがやってきたのはそれから大砲を三回ほど斉射した後だった。

「おい、ダーレル!? どこにいる? 出てこい!」

ドラケ船長は衣服や髪がびしょ濡れであった。そして小脇には、先ほど海に放り投げられたパウビーノの少女を荷物のごとく抱えていた。

「なんだ、ドラケじゃねえか? 貴様、一体何しに俺の船にやってきた!」

ダーレルは砲撃の指揮を副長に任せると、太い腹を巡らせてダーレルと対峙した。

「何しに、じゃねえ! お前、いくらなんでもこりゃあねえだろ!」

ドラケは海から拾い上げた少女の襟首を掴んでダーレルの前に突きつける。少女はまるで猫の子のようにだらつと吊り下げられた。

「なんだお前? まさかそんな役立たずを届けるために来たのか?」

「お前、こんなことしてギルドの奴らになんて申し開きする!? 大砲もガキどもも全部、借りものなんだぞ!」

「んなの知るかよ! お前と違って、俺はギルドの奴らにどう思われようと構いはしねえんだ! だいたい武器つてのは消耗品だろ? ギルドの連中だって、損失分の金をきっちり納めてれば文句は言わねえよ!」

要するに金銭で始末をつけると言っている訳だ。ドラケにはそれが気に入らなかった。

「ちつ、たつどうしてお前って奴はそんななんだ!」

「お前こそ! わざわざそれを言ってお前を苛つかせるためにこの船に来たのか?」

「いや、違う。アレを報せるためだ」

ドラケは再び少女を小脇に挟み込むと、舷側に近付いて窓から見える空を指差す。

「アレが見えるか?」

「何があるって言うんだ?」

舷側に歩み寄ったダーレルが見上げると、白い胴体に赤い丸の入った見慣れない何かが、少し離れた蒼い空をゆつくりと飛んでいた。

もしこの時、周囲が静かであればP3Cのエンジン音も聞こえただろう。しかしこのモナム号は大砲をひっきりなしに轟かせていて、その程度の音はすべて打ち消されてしまう。

「なんだありゃ?」

「二ホンのヒコウキって奴だ」

あれが何を意味するか分かるな？ とドラケは念を押す。

「さあ、分からんな？」

しかしダーレルは首を傾げるだけであった。

「要するに、今すぐここからずらからないと不味いことになるんだよ！」

「どうしてだ？」

「あの死告天使が姿を見せたら、次にやってくるのは多分『飛船』だからだ！ 飛船の噂は、お前も聞いているだろ？」

飛船というのはもちろん比喩表現で『飛んでいると見間違うほどに足の速い船』という意味である。海賊達の間で二ホンの船はそうのように噂されていた。

曰く、目にも止まらぬ速さで進む。

曰く、とてつもない威力の大砲を持っている。

だが、実際にそれを見たことがある者は海賊にはいない。その姿を直接見た者のほとんどは捕らえられ、ティナエに連行されてしまったからだ。

では何故そんな噂が流れるのかと言えば、ナスタに潜入した海賊側の諜報員が、逮捕された海賊に接触して情報を得たからである。

しかし、それがゆえにダーレルは耳を貸さなかった。

「んなもん、ただの噂だ噂。捕まった弱虫どもが、言い訳に尾ひれを付けただけだろ？ 確かに二ホンとやらの国の船は来てるが、飛船なんていうほどのもんじゃない」

「けど、お前もよく知る頭目連中だつてとっ捕まってるんだぞ！」

例えば、アヴィオン海に住む人々を恐れさせた海賊七頭目の内、ベナン・ガ・グルールとアガラー・ル・ナツハは既にティナエに捕らえられている。

「奴らが間抜けだっただけさ」

それでもダーレルは鼻を鳴らした。

「海賊七頭目に数えられていた連中が、揃いも揃って間抜けだったと？」

ドラケが真剣な眼差しでダーレルを見据えると、さすがにダーレルも自分が言い過ぎたことを認めた。

「分かったよ……謝る。だが、どうしてあのヒコウキとやらがいたら飛船が来るってお前は思ったんだ？」

「あいつらが何もしないでああやって飛んでいるだけだからだ。もし奴らが無関心なら何故わざわざここに留まっている？ 奴らがもし何かするつもりなら、何故直接何もしてこない？」

空からならば、岩を落とす、火矢を射かけるなど嫌がらせ以上の攻撃が出来る。それに対してこちらからは何も反撃できないのだ。

それなのに何もしてこないのは——より強力な攻撃方法を持つ者が別にいて、それが来るのを

待っているからだと推測できる。

「なるほどな……」

ダーレルもようやく納得したようだ。

「理解できたか？ 理解できたなら急いでずらかるぞ。いいな!？」

だが、ダーレルは鼻で笑った。

「あのなドラケ、お前知ってるか？ もし今、あのヒコウキとやらがここで起きていることを飛船に報せたとしても、奴らの仲間がここまで来るには、最短でも二日はかかる」

「二日だと？ どうしてそう言える？」

「ああ、ニホンの奴らの船は、一昨日^{おととい}ナスタに入港している。どうだ？ 驚いたか？ 諜報員をナスタに潜り込ませているのはお前だけじゃねえんだよ。そして奴らが港を出たという報せは来てない。ナスタからここまではおよそ百二十リーグ（約百九十八キロメートル）。どんなに速い船だつてこの海域までは二日はかかる。そうだろう？」

「だから奴らの船足は……」

「ドラケ、そういう講釈は俺にしないほうがいい。俺は元船大工なんだぞ。その手のことには誰よりも詳しい。これまでも『飛んでると見間違うほど速い』と言われた船は一杯あった。だがな、そんなものは大抵が比喩だ。そりゃそうだ、どんな船にだって限界があるんだからな。漕いで進む船なら全速で進める時間に限りがあるし、風を受けて進む船なら風よりは速くは走れないってこ

とだ」

「そ、それは、そうだが……」

「今アヴィオン海に流れている風は、平均で五ノッチ（一ノッチ＝一時間に一リーグ進む速度）がいいとこだろ？ 俺んとこの船守りがそう言ってる」

「あ、ああ」

「つまり、風ですら一日で進める距離は百二十リーグってことだ。一日ありゃ俺達がパンタグリユエル商船団を全部平らげて、その上で遠くに逃げるのも難しくない。この理屈は、お前にだって分かるよな？」

ドラケは舌打ちすると頭を振った。

「どうしてこうなんだか……」

このダーレルというドワーフは船を熟知している。海をよく知り、敵を知る努力もある程度は行っている。しかしだからこそ、その知識の枠を超えた存在には想像が至らないのだ。

それに対してドラケはこれまで自分の勘働きに従ってきた。勘の囁きに従ったから、生き残れてきたという自負もある。そしてその勘が「ヤバイヤバイ、めっちゃくちゃヤバイ」と大警報を鳴らしているのだ。

「だからよお、ダーレル……」

ドラケは最後の説得を試みた。

「うるせえ、今は稼ぎ時なんだ！ この商船団を見逃したら、今後いつこれだけのお宝に巡り合えるか分かったもんじゃねえ。なのに、それを捨ててスタコラ逃げようっていうお前の見のほうか俺には分かんねえんだよ！ それでも逃げるっていうのならまあいい、止めねえからお前達だけでどこにでも行きな。そうしたら割り前が増えて俺としてもありがてえくらいだよ！」

ダーレルはそう言ってガハハと嘲笑する。そして、可哀そうな人間でも見るかのような目をドラケに向けた。

ドラケは再度嘆息すると周囲の海を見渡した。

「ダメかな、こりゃ」

こうしている今も、ダーレル配下の海賊船は商船を襲い続けている。また一隻、行足の止まった商船に接舷して、海賊達が剣を手に乗り移っていく。

ダーレルはそんな戦いを指差した。

「おい、ドラケ。あの船が見えるか？ あの船には、お宝と女が一杯詰まっている。配下の奴らはそれを楽しみにしてるんだ。それをみすみす見過ごせてか？ せっかくの乱暴狼藉を楽しみにしてる奴らにどんな言葉で諦めろって言える？」

ダーレルの配下は戦いの興奮と勝利の予感に血を沸き立たせている。このまま全てを食い尽くすまで、獣欲に任せた一方的な振る舞いが出来ると思い込んでいるのだ。

ドラケは仕方なく自分だけ逃げる決心をした。

「分かったよ。俺はもう何も言わない。お前の好きにすればいい」

そして左腕を上げながらダーレルに背を向ける。

第二甲板で懸命に働いているパウビーノ達の行く末を思いつつ、ドラケはモナム号を後にしたのである。

「どうなりました？」

ドラケがオディール号に戻ってきた。

マストの斜桁から垂れている動索にぶら下がり渡ってきた船長を、クォーターマスターのパンペロと信号手のガルツが迎えた。

「ダーレルの奴は、俺の言うことに従う気はないそうだ。このまま獲物を追うとよ。今を逃したら、お宝を積んだ船にいつ出会えるか分からないからな」

「そりゃそうですよ！ 私だって同じ考えだし！」

「ふん、それは馬鹿の考えだな」

ドラケに鼻で笑われ、パンペロは悲鳴を上げた。

「船長!!」

「まあいい、これで奴に対する義理は果たした。俺達だけでずらかるぞ！ 航海士、スプーニ航海士！ 東微北に針路をとれ！」

航海士のスプーニは軽快な返事をすると言業に取りかかった。

「ところで船長、そいつは何なんです？」

ガルツはドラケの右脇を指差す。ドラケは海から拾い上げたパウビーノの少女を、ずっと小脇に抱えたままだったのだ。

「あつ、ヤベえ。せつかく届けたのに持って帰ってきちゃった……ま、あのままじゃろくな目に遭わなかったろうし、別にいいか。嬢ちゃん、名前は？」

少女はぼそつと答えた。

「トロワ・リ・ヴィエール……」

「トロワか、分かった。お前は今日からこのオデイル号のパウビーノだ。いいな？」

少女が小さく頷くと、ドラケは少女をガルツに押しつけた。

「この娘を頼む……掌帆長！ 帆を張り替えろ！」

針路が安定すると、海賊船であることを示す黒い帆を下ろし、代わりに白い帆が掲げられていく。その作業を見ながらパンペロは囁いた。

「船長、みんな何も言いませんが、腹の中では不満に思ってます。せつかくお宝を目の前にしてるのにどうしてって。場合によっては反乱を企てる奴が出てくるかもしれません」

船長というのは船では絶対の権威者だが、かといって盤石の権力を握っている訳ではない。

ドラケの配下にも様々な派閥がありそれぞれの領袖が二番手、三番手となっている。そうした連

中は今の地位で満足なんてしていない。いずれはドラケを追いつ落として自分こそが船長に、自分こそが頭目になるという意志を固めてドラケの背中を虎視眈々と見ているのだ。

もしドラケが隙を見せたら、その連中が不満を抱いた海賊達に「ドラケを追いつ出せ」と焚き付けるかもしれない。

「分かつてる。だけど、命あつての物種だ。そうだろ？」

しかしドラケはパンペロの警告も受け容れず、そのまま船尾楼甲板へと向かった。

「船長！」

ドラケの後ろを、信号手のガルツがトロワを麦の袋のように肩に担いで続く。

海賊七頭目の一人としてアヴィオン海にその名を轟かせるドラケ・ド・モヒートの海賊船団四隻は、未だ戦いが続く中、そうして海域を後にしたのである。

＊

＊

まるごさんな
〇五三七時——

『碧海の美しき宝珠ティナエ』派遣海賊対処行動司令部

『司令部、ユラヒメ〇二二。哨戒エリア〇四六六にて海賊に襲われている商船団を発見した……』

P3C哨戒機『ユラヒメ〇二』より伝えられた情報は、ティナエ共和国海軍基地の一角を借り受けて設けられた日本国派遣海賊対処行動司令部に伝えられた。

「司令！」

「今回は海賊船がやたらと多いな」

特地における海賊対処行動に関する一切の責任を負う海賊対処司令は、差し出されたメモを受け取ると呻いた。

「商船団が大規模な分、海賊も船数を増やしたのでしよう。可及的速やかな対処が必要です」

「うむ……特地派遣ミサイル艇隊は緊急出港せよ！」

司令は遲疑なく決断を下した。派遣海賊対処行動水上部隊全てに出動命令を発したのである。

○五四五時——

特定时間の午前五時四十五分。その時刻は黒須智幸にとっては、あと十五分で自然に目覚めるという頃合いであった。

黒須には特技がある。それは「この時間に起きる」と決めて寝台に入ると、その時間に目覚めることが出来るというものであった。

そのことを同僚に話す度に、それは自衛官としてはかなり羨ましい特技ではないか？ と言われたものである。しかし物事にはよい側面があれば悪い側面もある。それは予定した時刻以前に起こ

されてしまうと、体調に悪い影響が出るということであった。

枕元に置いた無線機から流れるけたたましい電子音により、黒須の夢は強引に破られる。

睡眠には脳細胞に蓄積された老廃物を除去するという作用がある。その作業を強制的に中断させられたためか、彼は頭重感と軽い頭痛を覚えた。自律神経の機能が失調しているのかもしれない。これに電子音のけたたましさが合わさり、アルコールなど摂取してないのにまるで二日酔いの朝のような苦痛が彼を攻め立てていた。

「うう……」

それでも騒音の発生源である受話器型インカムに手を伸ばす。感触を頼りに床頭台を弄つてそれを耳に当てた。

「どうした？」

聞き慣れた部下——北原二等海尉の声だ。

『おはようございます艇長、緊急出航です』

緊急出航。それだけ聞けば黒須にとっては十分で、少なくとも現時点での理由説明は不要だった。

「了解した。すぐに行く」

だが黒須は、小さな違和感に引っかかった。

「『はやいぞ』はぶっつしたっ？」

いつ命じられるか分からない緊急出航に應じるため、海賊対処行動水上部隊では応急出動艦が指

定され、いつでも出航できるよう準備を済ませている。少なくとも現時刻では僚艦の『はやぶさ』が担当だったはずなのだ。

「『はやぶさ』にも緊急出航がかかっています」

つまりこのアヴィオン海に派遣された艇の二隻ともに出航が命じられた訳である。それだけでも重大な事態が進行中だと推測できた。

「了解した。直ちに向かう」

黒須はベッドから無理矢理身体を起こすと、深々と溜息を吐いたのだった。

素早く身支度を整えた黒須は、姿見の前で自分の姿を確認した。

海上自衛隊三等海佐の制服は汚れていないか？ 靴は磨かれているか？ 徽章、防衛記念章は傾いてないか？

それらの全てが遺漏なく装着されていることを確認してから部屋を出た。

『人間はその制服通りの人間になる』というのが、ナポレオン・ボナパルトの箴言だ。それは陸でも海でも空でも、いや軍だけでなく、どんな場所においても適用される真理だと黒須は考えていた。木製の戸を静かに閉じる。そして階段を下りていくと、そこに下宿の主が立っていた。

厳密に言うなら『主』ではなく、主の孫を名乗る少女だ。

短い黒髪、端正な顔立ちをした美しい少女が微笑んでいた。

名前はファティマ。この娘を筆頭に、アティア、パティ、イニー、ミニー——おそらくは血の繋がっていない姉妹五人がこの下宿を切り盛りしている。

ファティマの歳は十二〜十四くらいだろうか？ 彼女は下宿民の朝食の支度を台所でしていたようだ。それで、階段を下る黒須の気配に気付いたのだ。

「もうお出かけですか？」

黒髪童女のファティマは黒須に尋ねる。

「少しお待ちくださるなら、朝食の支度が出来ますが？」

「せっかく用意してくれたのに申し訳ない。今はそれだけの時間がなくてね」

「愚問でしたね？ かしこまりました。お気を付けていつてらっしゃいませ。早くのお戻りを。晩のお食事こそ、召し上がってくださいましね……」

「ああ、そのつもりだ」

「でも、クロス様はそうおっしゃりながら帰りがとても遅かったり、不意に戻られたりします」

小さく唇を尖らせて拗ねる少女の表情に可愛らしさを感じた黒須は、苦笑しつつも頭を軽く下げた。

「ごめんよ……けど、そういう種類の仕事なので理解して欲しい」

「ええ理解しています。けど、理解は寛恕とは一致しませんわ。不満に感じてない訳ではないのですよ」

「分かってるよ。では行ってくる」

黒須は童女の見送りを受けながら異世界に借りた下宿を出た。

数歩歩いて振り返ると、下宿から鸚鵡鳩おうむばとが大空高く飛んでいくのが見えた。

それが、近年になって大陸各地で伝書鳩のように使われ始めた極彩色の鳥であることを黒須は知っている。ファティマがどこかの誰かに何かを伝えようとしているのだ。

「あの娘が、海賊の諜報員とはねえ……」

ティナエの防諜機関『黒い手』からの通報によると、下宿の少女達は海賊がこのナスタに潜入させた諜報員であり、日々黒須達の動向を海賊に知らせているという。

黒須はそのことを知ると、当然ながら下宿を別に移すことを考えた。自分の動向が筒抜けになっているのは任務を十全に果たすことが出来なくなるからだ。しかし上長や各方面との調整の結果、現状のままこの下宿を利用し続けることになった。ティナエの防諜機関『黒い手』からの要望が強く働いたのだ。

どこから情報が漏れているかさえ弁わきまえていれば、それを逆手にとって漏れ出る情報内容をコントロールできる。彼女達が誰にどのように情報を伝えるかを手繰たぐれば、敵の全貌や諜報活動の根源を掴むことにも繋がるのだ。

『黒い手』の抜け目ない活動を見ていると、もしかすると日本の防諜機関よりも優秀なのではないかと思えてくる。諜報活動の神髓しんすいとはテクノロジーではなくセンスだという証左なのかもしれない。

ティナエ共和国の首都ナスタ。その周辺には大小様々な小島が存在する。

派遣海賊対処行動水上部隊は、ティナエ政府と地位協定を結んだ上で、その島の一つサリンジャー島を借り受けて基地を置いた。

サリンジャー島は、ティナエ政庁のある首都から程よい距離にあり、また喫水の深い大型船を着ける港や埠頭を建設できるだけの水深にも恵まれていた。

更に、ほぼ円形をした島の直径は約二千二百メートル。P3Cを飛ばすのに必要な距離を満たしているため滑走路も設置できる。まさに理想的な基地用地だったのだ。

問題は地権者との交渉だったが、それも簡単に済んだ。

元よりその島はティナエの統領ハーベイ・ルナ・ウォールバンガーの私的な持ち物であったし、住んでいたのはその娘プリメーラ・ルナ・アヴィオンだけであつた。だから立ち退きも手早く行われ、簡易ながら基地の建設も速やかに進んだのである。

基地の岸壁に辿り着いた黒須の前には、一隻のはやぶさ型ミサイル艇が繫留されていた。そこそが黒須の指揮する『うみたか』である。

舷梯げんていを渡ると当直士官の北原二等海尉が待ち構えていた。

「艇長、おはようございます！」

既に乗組員達は揃っていて、出航準備も整いつつあると報告された。

「うむ」

敬礼に答えながら頷く。黒須はそのまま艦橋へと上がっていった。

「おはようございます」

艦橋にいたクルー達が挨拶を投げかけてくる。黒須は返事をしながら青と赤のツートーンのカバーが被せられた右側の艇長席に着き状況の説明を求めた。

「ティナエより西微南、約一一五リーグに位置する海域で民間商船団が海賊に襲われています」

「ふむ、一一五リーグか……」

リーグとは特地で海陸問わずに用いられている距離の単位で、特地世界における緯度の一分の距離（約一・六五キロメートル）を意味している。

銀座側世界では緯度一分の距離（約一・八五キロメートル）は一海マイル（一海里）とされているが、その単位系を特地で使用すると混乱が生じてしまうので、あえてリーグという単位で区別しているのだ。

「報告が入った時点で民間商船の数は二〇、海賊船は二三隻。現地海軍の艦艇が防戦しておりますが、戦力差から全滅は必至、時間の問題と思われています。司令からの命令は『全速で現地に向かい民間船舶を保護救出せよ』です。間もなく隊司令と、海保の方々が到着いたします」

「そうか、了解」

「次は気象、海況です……」

当直士官の北原からの天候と海況の説明が終わった頃、隊司令の濱湊伸朗二等海佐が隊付き幹部とともに艦橋へ上がってきた。

「海保の方が到着されました」

続いて海上保安庁の第一次アヴィオン周辺海域派遣捜査隊長高橋健二等海上保安正（海自の三等海佐に相当）が、部下十名を引き連れて舷梯を渡って乗艦してくる。

黒ずくめの戦闘服と八九式小銃で完全武装した彼らは、海上保安庁が誇る特殊警備隊員達だ。

彼らが乗り込んでくる理由は、海賊対処行動があくまでも警察活動だからである。

海賊の取り締まりにおいて海上自衛隊は足場となる艦艇を提供する立場であり、取り締まりの主役はあくまでも彼ら海の警察官達なのだ。

彼らが食堂の座席に着いたという報告を受けると北原は左右に告げた。

「これより出航いたします。海保の方よろしいですね？」

高橋隊長が頷く。

「はい、お願いいたします」

「司令……」

「うむ」

「艇長」

「よろしく」

するとエンジンが唸り、艇が少しずつ動き始めた。

『うみたか』は三基のウォータージェットポンプを推進器としている。そのため一般の護衛艦と違って離岸に曳船の支援を必要としない。

ジェットの噴出方向を巧みに変えながら艦首を一旦岸壁に押し当て、そこを軸として艦尾を岸壁から離していく。そして角度が出来ると後進で離岸するのである。

「出航よーい」

ラッパの合図とともに舳いが外され、『うみたか』はゆつくりと岸から離れていった。

緊急出航であるため、ここから全速力で……と先を急ぎたいところだ。しかしサリンジャー島の周囲を含めたナスタ湾には大小様々の船がいた。それらは海上交通を担う小型の舟艇、舢舨、漁舟に勤しむ漁船などだ。

『うみたか』はまず、周囲を航行するそれらに接触しないよう気を配りつつ進まなければならなかった。

「右舷側の漁船の動きに気を配れ」

黒須が当直士官に注意を促す。

この世界の漁船の多くは帆船だ。そのため風上に向かう際はジグザグに針路を変える。

問題は針路変更のタイミングが船それぞれに違うこと。更には周囲の船に対してまったくお構いなしに自分勝手な動きを見せることだ。

そのため他船を見張る際は、ただ船を見るに留まらず、甲板にいる乗組員達の動きを見て針路の変更を予測することまで強いられる。それ故に北原や黒須は、一度ならず冷や汗を掻くことになった。

だが、バスケス島を左手に見ながらアウフ水道を抜けてナスタ湾から出ると事情は変わった。

外洋に出てしまえば海が広くなる分、航行する船数が圧倒的に少なくなり煩わされることもなくなる。

「第三戦速！」

北原が増速を命じると『うみたか』はミサイル艇としての本領を発揮し始めた。

「第五戦速！」

ゼネラル・エレクトリックLM500という強力なジェットエンジン（分かる人に分かるように言うなれば、A・10サンダーボルトⅡのエンジン）を三基搭載する『うみたか』は、軸馬力6130×3の強力なパワーを用いて力尽くで海を進むのだ。

「第六戦速！」

鋭い舳先に海水が引き裂かれ、白い引き波が背後にある紺碧の海に広がっていく。

「第七戦速！」

モーターボートが海を滑るように、波を跳ねるように、『うみたか』は進んだ。

「第十戦速」

ついに最高速に達する。

時速にしておよそ八〇キロメートル。この速度ならば目的海域まで二時間と少々で到着できるという計算であった。

司令部より通信が入ったのは、『うみたか』がサリンジャー島を出航して一時間ほど進んだ時であった。

『司令、艇長、ご報告いたします。先行して出航した『はやぶさ』が、目的地に向かう途中で沈船の残骸にしがみついた民間人を発見しました。海賊の被害者のようです。その揚収作業のために、現場到着が遅れるとのことです』

黒須と濱湊が、不意の緊急出航のせいで取り損ねていた朝食の代わりに艇内の士官室で取っていると、北原二等海尉に代わって当直に上番した隊付き幹部の松本二等海尉が『はやぶさ』の現況を告げる。

「そうか、溺者を見つけてしまったのであれば仕方ない。これで、我々が現場に一番乗りになるって訳だな」

司令の濱湊は嬉しそうに言った。現場一番乗りがよほど嬉しいらしい。しかし黒須は眉根を寄せた。

「司令、『うみたか』一隻で海賊船一三隻を相手にしろと？」

「出来ないと言っても言うのかね？」

濱湊は黒須に挑戦的な笑みを向けた。

「海賊船を沈めてしまってもよいとおっしゃるのなら、六二口径七六ミリ単装速射砲が威力を発揮してくれるでしょう。ですが、捕まえろとなりますと……」

黒須は救いを求めるような目で、同じテーブルを囲む海上保安官を振り返る。

高橋健二等海上保安正は少しばかり強めの口調で返した。

「武器使用は、犯人の抵抗や民間人の生命保護といった場合にのみ許されることです。ましてや船体に向けた砲撃など、よっぽどの理由がない限りは……」

しかし濱湊は肩を竦めた。

「現在進行形で海賊に襲われている民間の商船を救う。これがよっぽどの理由にならなければ何なのでしょいか？」

現実的に見れば、海賊は無辜の市民を殺傷している。

海賊に数倍する戦力が手元にあつて海賊船を取り囲んでしまうことが出来るなら、犯人を無傷で捕らえることを考えるべきである。しかしミサイル艇一隻では難しい。民間商船と民間人を助けることを第一とするのなら、最小限の武力行使とは海賊の無力化、しかも瞬間的な——つまり圧倒的火力による撃沈でしかないのだ。

とはいえ、高橋としても念を押さない訳にはいかない。

「しかし、あくまでも民間人を守るためであるということを念頭に置いていただきたい。武器使用の判断も私がいたします。よろしいですね？」

「もちろんですとも！」

すると濱湊は大きく頷いたのだった。

「P3Cからの映像が入りました」

更に一時間ほどすると、P3Cからの通信が直接入るようになった。CIC（戦闘指揮所）に据えられたモニターにP3Cが撮影した動画が映し出されたのだ。

広い海に白い帆を広げた商船を、黒い帆の海賊船が追跡している。

カメラがパンされて別の船にレンズが向けられる。そこでは商船に乗り込んだ海賊達と乗組員が激しい白兵戦を繰り広げていた。

更にカメラは、既に拿捕されたらしい船へと視線を向けた。

帆を外された船の数は既に八隻に達している。商船団の数は当初二〇隻と報告されていたからその半数近くが拿捕されてしまった計算になる。

濱湊が画面を指差して言った。

「いかにもな海賊行為だな。けしからん！　しかし捕らえられた人質とかはどこにいる？」
すると高橋が、これまでに逮捕した海賊達から得た情報などを基に説明を始める。

「ええと、この世界の海賊達は捕虜を拿捕した船にまとめておくそうです。なので海賊船に曳航えいこうされている帆の外された船のどれかでしょうな」

自分達の船に捕虜を乗せておくと、戦闘に巻き込まれ傷を負い、商品価値が低下したり、反乱を起こされる可能性がある。我慢の出来ないならず者が、捕らえた女性に手を出そうとすることもあるし、奪い合いの喧嘩が起ることもしょっちゅうだ。そのため捕虜を自分達の船に乗せるのは、拿捕できた船がない場合に限られていた。財宝や積み荷の類を自分の船に乗せたいがため、人間を乗せるスペースがないという理由もある。

帆と舵板さえ取り外してしまえば、反乱を起こした捕虜に乗っ取られる危険もないし、それでも騒ぎ出すようなら砲撃するなり、火を放つなりして沈めてしまえば簡単に片が付く。そしてそれが分かっているから捕虜も大人しくしているのである。

「なるほど、それならば心置きなく黒帆の海賊船を沈められるって訳だな」

濱湊の言葉に、高橋は躊躇ためちいっつも頷いた。

「え……まあ、そうなりますね」

『間もなく目標海域に入ります。これより海賊対処行動準備を令します。よろしいですね、海上保安庁の方？』

艦橋の松本がインカムを通じて確認を問いかけてきた。黒須の傍らでモニターを睨んでいた高橋は頷いて了解と返答した。

『司令?』

「もちろん了解だ。俺はこの時を待ってたんだからな!」

『艇長?』

「了解だ」

黒須も頷きながら言った。

「準備が令されたら、私はCICで指揮を執る……」

そこで黒須は高橋を振り返った。

「高橋隊長は、艦橋の艇長席をお使いください」

ミサイル艇『うみたか』は海上を高速で機動する。そのため操舵席をはじめとして、食堂の椅子までもがレーシング仕様のバケットシートで、四点ハーネスが設置されている。立っているのは危険なのである。

「海賊対処用」意」

艦橋の松本が、配置を令した。

すると艇内にいた乗組員達が配置についていく。

司令の濱湊は、艦橋左側の自分の席につくとインカムを通じて言った。

「黒須! 私の渡した音源を頼むぞ。二曲を順番にエンドレスでな!」

「音楽を流すのですか?」

艇長席についた海保の高橋が疑問符を浮かべる。すると濱湊はニヤリと笑って続けた。

「以前、この世界で、盗賊に襲われた街を救いに急行した陸自のヘリ部隊の指揮官は、ワグナーを鳴らしながら向かったそうです。士気高揚と、敵に対する心理的な威圧効果を狙ったんです……実際に効果的だったとか。我々もせっかくLRAD(長距離音響発生装置)を持ってきたんですから、それに倣おうかと思っております」

「は、はあ……」

そうしている間にも艦橋の他の乗組員達がハーネスでしっかりと身体を固定していった。

更に舷側の一二・七ミリ機関銃、艦橋上に追加設置されたLRADにも乗組員が取り付いてこれらを構える。

するとLRADや艦内のスピーカーから音楽が流れ始めた。そのイントロはある年齢以上の海の男なら誰もが知っているものであった。

高橋の脳裏にもその曲が用いられた映画の日本語タイトルが思い浮かぶ。それどころか夜の大西洋を疾走する潜水艦の姿までもが浮かんだ。

「こ、これは『Uボート』!?」

その曲は、『Uボートオリジナルサウンドトラック』に収録された『護送船』、そして『帰還』。海上を突き進む『うみたか』に相応しく疾走感溢れる曲であった。

艦内中に流れる『Uボート』のサントラ曲を聴きながら、黒須は溜息交じりに呟いた。
「LRADはそのためだけに積んだ訳じゃないのに……」

しかしCICの乗組員達はその軽快なリズムに合わせるように頭を軽く振っている。
波を切って揺れる艇のリズムも相まって、艇全体が一体化していく気配を感じる。そのため黒須も、まあいいかと受け容れることにした。

「左舷、一時半方向に船です！」

黒須は戦闘指揮の中核CICに座ると、目前に並ぶモニターを見渡す。すると、進行方向やや左に船が四隻見えた。

映像を拡大して水平線上に見えてきたその姿を確認する。

白い帆を張っているところから察するに、海賊から逃れてきた船であろうか。

しかし帆はいくらでも変えられる。P3Cから報告のあった通り、海賊行為の途中で現場海域から離脱した船という可能性もある。

『あの船、明らかに怪しい。どうしますか？』

松本がCICの黒須にインカムを通じて問いかけてくる。
すると司令の濱湊が言った。

『急ぐべきは海賊の捕縛ではない。海賊に襲われている民間人の救出だ。現場に駆けつけることを優先したいと俺は思う。海保の方はどうか？』

『私も同じ考えです。しかしもし該船の傍を通過するなら、後の捜査に役立つよう写真だけは撮っておきたいところで』

高橋も濱湊の意見に同意したが、その上での条件を提示してきた。二人の意見には黒須も同感である。写真を撮っておきたいというのも当然であった。

「では現場に急ぎましょう。松本、そういうことだ」

『了解！ 取り舵七度』

『取り舵七度……ヨーソロー』

『うみたか』は、針路を少しばかり変えて目前の四隻の傍らを掠めるように進んだ。

「モドーセー」

あまり比較目標のない海だと実感できないが、他の船が海に浮かんでいるだけで、今の『うみたか』がどれだけの速度で進んでいるのかがよく分かる。

帆船側からすれば、瞬く間という表現が相応しいだろう。

カメラを構えていた海上保安官が、すれ違い様にシャッターを押した。

これにより、目標の四隻にいた乗組員達の姿を、こちらを見て驚いている表情まできっちり写すことが出来たのである。

*

*